

私達一般的な日本人は、肌の色などの人種の違いにあまり偏見がなく、無頓着なところがあります。これは、縄文1万年など日本の長い形成過程で、日本にたどりついた民族と争うことなく混ざり合い、助け合い、日本語圏の国をつくり、歴史上、他の民族から独立と国体を失うほどの凄惨な侵略を受けたことが無い、稀な民族であることが理由の一つかもしれません。

しかし、西洋における民主主義の発祥古代ギリシャにおいて、アリストテレスの著書「政治学」に記されているように、“知性の有無によって、生まれながらに自由人と奴隷と定められた人間が存在し、奴隷自身も自由人に擁護されることが有益である”という民主主義と奴隷が社会構造として両立するという認識は、その後、優秀な白人と劣等な有色人種という人種間の優劣の観念を形成し、植民地政策と凄惨な虐殺を正当化しました。

幕末、これを目の当たりにした私達の先人は、非白人として唯一、西洋に全てを学び、対抗する力を蓄え独立を死守するという選択をします。

日清・日露戦争に勝ち、第一次世界大戦で戦勝国側となった日本は国際連盟の常任理事国となり列強国として扱われるようになります。しかし実態は、特にアメリカにおける日本人に対する人種差別は激しいもので、1906(明治39年)サンフランシスコ学童隔離、1913(大正2年)カリフォルニア排日土地法成立など人種差別がおこなわれていました。

1919(大正8年)、第一次世界大戦後のパリ講和会議で世界史で初めて国際社会に人種差別撤廃条項が日本から発議されますが否決されます。その後1924年、排日移民法がアメリカ全土で発布され、これは1952年まで長きにわたり続きます。

**太平洋戦争(大東亜戦争)※の原因について**、昭和天皇の独白録の冒頭の発言を抜粋します。“原因を尋ねれば、遠く第一次世界大戦後の平和条約にある。日本の主張した人種平等案は列国に認められず、黄白の人種差別は依然存在し、排日移民拒否の如きは日本国民を憤慨させるに充分で、かかる国民的憤慨を背景として、軍が立ち上がった時に之を抑えることは容易な業ではなかった”と述べられています。

私たちは先の戦争において、悪い軍の暴走でおこり、単純に国民が受け身で犠牲者であったと語られることが多いですが、昭和天皇のお言葉のとおり、事実と異なります。

先の戦争に至る経緯、原因は非常に複雑なものでしたが、民主国家にとって戦争への国民の意識は重要で、国民の怒りは戦争に至る原因の一つとして重要なものです。また、その怒りをあおったマスコミの存在も忘れてはなりません。

※大東亜戦争は昭和16年閣議決定の正式名称。戦時中に行われた初めての人種解放アジア首脳会議、大東亜会議を連想させるため、戦後GHQが使用を禁止。太平洋戦争に書き換えることを命じられる。

### 忘れがたい経験(抜粋) W・E・Bデュボイス

「最後の日に、私が東京の帝国ホテルで料金を支払っていると、大声でしゃべる典型的なアメリカ人白人女性が割り込んできた。アメリカであればただちに彼女のほうを向いて、彼女の対応をしないまでも、詫びを言うか言い訳をするところであろう。しかし、東京では違った。彼は目で合図もしなければ頭をめぐらせることもなかった。彼は注意深く私の対応を終えると、ゆっくりと日本式の丁寧なお辞儀をして、それからアメリカ人女性の方に向き直った。」後に、フロント係の毅然とした態度に、これまでの白人支配の世界と違った、新しい世界の幕開けを予感した、と語っています。

1936(昭和11年)ピッツバーグクリア紙掲載。

アメリカ公民権運動指導者・黒人初の博士号取得